

『釈迦の本地』の諸本

本井牧子

るものである。

一 『釈迦の本地』の三系統

— 伝記系・本地系・釈迦物語 —

釈迦の一生を描く『釈迦の本地』は、中世から近世にかけて、写本のみならず、絵巻、絵入本など、さまざまなかたちで広く流布した物語である。かつては仏伝のみで一書を成すものとして最も古いものとかんがえられてきたが、長承三年（一一三四）の奥書をもつ『釈迦如来釈』⁽¹⁾、永徳三年（一一三三）本奥書の『教児伝』⁽²⁾、康応元年（一一八九）本奥書の『釈迦如来八相次第』⁽³⁾など、先行する仏伝関連の資料が知られるにおよび、このような和製の仏伝の流れのなかで本作品をとらえる段階にいたっている。さらに、東アジアの〈仏伝文学〉という枠組みからの検討なども試みられている⁽⁴⁾。

一方で、『釈迦の本地』作品そのものについての研究は、必ずしも十全になされているとはいえない。そのひとつの障壁となっているのが、残存諸本の多さである。大枠としての分類については知見が共有されているものの、あらたな伝本が続々と確認されていることもあって、諸本の状況を総体的にとらえるまでにはいたっていないのが実状である。

そこで、小論では、あらためて『釈迦の本地』諸本の整理・分類を試みることにする。あくまでも基礎作業のレベルに留まるものではあるが、作品研究のための第一歩となることを期す

『釈迦の本地』と総称される物語は、大きく三つの系統に分けられることが知られている⁽⁵⁾。以下、本稿においては『釈迦の本地』〔本地〕はこの三系統を包括する作品名として使用し、各系統を伝記系、本地系、釈迦物語と称することとする。まずはこの三つの系統を概観することからはじめたい⁽⁶⁾。

第一の系統である伝記系の諸本としては、以下の三本が知られている（《》内は略称）。

- ・ 天理大学附属天理図書館蔵写本《天理A本》⁽⁷⁾
 - 一冊 漢字片仮名 「釈迦出世本懐伝記」(内題)
- ・ 学習院大学図書館蔵(戸川浜男氏旧蔵)写本《学習院本》⁽⁸⁾
 - 一冊 平仮名 「しやくそんしゆつけほんくわいのてんき」(内題)
- ・ 黒部通善氏蔵写本《黒部本》⁽⁹⁾

一冊 漢字片仮名 「釈尊出世本懐」伝記（内題）

これらの三本は、『学習院本』が平仮名本であるという違いはあるものの、ほぼ同一の題記をもち^(上)、本文も概ね同内容といつてよい。『天理 A 本』には天正九年（一五八一）の書写奥書が付されており、この系統の流布時期についての指標となる。三系統のなかではもつとも内容が簡略であり、分量的にも短いものである。

第二の本地系諸本は、残存数が多く、写本や刊本、絵巻や絵入本など、さまざまに展開した形跡がみられるものである。伝記系と共通する本文も多いが、概して伝記系よりも記述が詳細であり、伝記系にみられない挿話も散見することから、伝記系から増補、改変されたものとかがえられている。

その傍証ともいえるのが、伝記系『天理 A 本』末尾に記された涅槃和讃である。本地系の仏の涅槃にかかわる場面には、表現のみならず、挿話のレベルにおいても、この和讃との密接な関わりがうかがわれることから、この和讃が、伝記系から本地系への増補に際して参照されたことが推測されるのである^(下)。本地系は、伝記系を核として、周辺のさまざまな資料をとり込みながら、増補、改変を加えることにより成立した本文とみてよいであろう。

本地系諸本のなかには、伝記系『天理 A 本』に先立つ永正年間（一五〇四〜二〇）の年紀をもつものもあり（後掲の折口信夫旧蔵写本）、本地系の成立、ひいては『釈迦の本地』という作品の成立時期をかんがえる上で重要である。この本地系諸本のさらなる整理・分類については、次章であらためて検討する

こととする。

一方、第三の釈迦物語については、現在確認されているのは一本のみである。

・彰考館旧蔵写本『彰考館本』^(上)

一冊 漢字平仮名 「釈迦物語」（題箋）

この『彰考館本』の末尾には、寿仙院日箋なる人物による慶長十六年（一六一一）の書写識語がみられる。本地系にもつきつとも、仏伝経典へと回帰しようとする志向が強くみられることが指摘されているが^(下)、その改変の度合いは甚だしく、本地系本文に取材しつつも物語の枠組自体が再構築されており、ほかの二系統とは一線を画するものである。『釈迦の本地』の影響下に成ったと推測される『釈迦八相物語』（寛文六年（一六六六）刊）などの近世の仏伝にも通じる、『本地』の展開の一形態とみなしうるものであろう。

ところで、これらの本文系統は明確に区別可能なものであり、分類に困難を伴うものではない。ただし、一本だけ、大筋で第一の伝記系の本文を有しながら、第二の本地系諸本との共通本文をも随所にもつという、いわば混態本が存在する。真福寺に所蔵される写本がそれである。

・真福寺蔵写本『真福寺本』^(下)

一冊 漢字片仮名 「通俗釈尊伝記」（後筆外題）

『真福寺本』には後補表紙が付されており、そこに「通俗釈

尊伝記」とと墨書されているが、本文料紙には題記はなく、当初の題は不明である。転法輪に相当する部分のあと、糞泥駒と車匿にふれ、「釈尊伝記者是也」と本文が終わっている。

この《真福寺本》は、伝記系と本地系の本文を併せもつという意味で、他に類をみない本である。例えば、《真福寺本》には、太子が出兵直後に外道によって妨害される話や、檀特山での修行のあと、仙人が授法の際に語る本生譚がみられるが、これらの挿話は、伝記系にはみられず、本地系に共通するものである。こういった挿話単位のものをはじめ、表現のレベルをも含め、《真福寺本》にはあきらかに本地系の本文が混在している。《真福寺本》は、伝記系と本地系とで本文が対立する場合においては、ほぼ伝記系の本文となっていることから、大略伝記系とみなしてよい。一方で、《真福寺本》に散見する本地系本文は、伝記系に対応する挿話や記述がない、本地系独自部分にみられることが多い(具体的な異なる様相は次章で示す)。室町後期の書写とされる《真福寺本》のこのようなありかたを、伝記系から本地系へという展開の途上に位置づけるのか、もしくは本地系本文成立後に、部分的にとりいれられたものか、もしくはかという問題については、慎重な判断が必要であるが、伝記系本文を大きく改変する意識がみられないことから、現時点では後者の可能性が高いのではないかとかんがえている。以下、《真福寺本》はひとまず伝記系に分類し、必要に応じて言及することとする。

二 『釈迦の本地』本地系諸本の分類・整理

先に述べたとおり、『釈迦の本地』の三系統のうち、もつとも多くの諸本が残存しているのは第二の系統として挙げた本地系である。『釈迦の本地』諸本については、竹村信治氏による先行研究がそなわり、本地系諸本にかんしても精緻な比較検討がなされている^{〔十五〕}。近年あらたに確認された伝本も多いが、竹村氏の指摘は諸本が増えても有効である。本稿では、氏の論にもとづきつつ、現在確認しうる諸本を対象を広げ、あらためて分類・整理を試みることにする。なお、各伝本には程度の差こそあれ独自の特徴がみられるが、ここではそれらの個別の特徴はひとまずおき、一定の重なりに着目して分類することとする。

① 分類の概略と諸本一覧

まずは分類の概略を示しておきたい。本地系諸本は二つの系統に分類可能である。すなわち、残存数が多く、広範な流布をみた系統Ⅰと、それに比して大幅な省略が加えられている系統Ⅱとである。ここでは前者をⅠ流布本系、後者をⅡ略本系と称することとする。

Ⅰ流布本系は、さらにi刊本系と、iiそれ以外(仮に「非刊本系」と称する)に分類可能である。i刊本系のなかにはi①古活字本系とii②整版本系が存在する。古活字版および整版本については複数の版が確認されているが、ここでは古活字版としては唯一の完本である龍門文庫蔵古活字版と、現存する整版本のなかでもっとも刊行が早い寛永二十年橘屋源兵衛刊本にそれぞれ代表させることにする^{〔十六〕}。ii非刊本系のなかにもま

た、密接な関係を有することがあきらかな伝本群が二つある。そこでii非刊本系については、それらの二つのグループおよびそれ以外という三つに分けて示すこととする。

以上の分類にしたがって、管見に入った諸本を一覧すると以下のようなになる。なお、絵のみの断簡および稿者未見につき分類不明の伝本については末尾に一覧した。

I 流布本系

i 刊本系

i① 古活字本系

- ・龍門文庫蔵古活字版《古活字本》^(一七)
 - 三冊 平仮名 「しやかのほんぢ」(内)
- ・中野幸一氏蔵絵入本《中野本》^(一八)
 - 五冊 平仮名 「釈迦一代記」(箱書)
- ・大英博物館蔵絵入本《大英絵入本》^(一九)
 - 五冊 平仮名 「しやかのほんぢ」(簽)
- i② 整版本系^(二〇)
 - ・寛永二十年橘屋源兵衛刊本《寛永版本》^(二一)
 - 三冊 平仮名 「釈迦の本地」(内・尾)
 - ・福岡女子大学蔵横型絵入本《福女本》^(二二)
 - 五冊 平仮名 「しやかの本地」(簽)

ii 非刊本系

ii①

- ・大谷大学図書館楠邱文庫蔵写本《楠邱本》^(二三)
 - 一冊 漢字片仮名 「釈尊出家伝記」(内)
「釈尊出家本懐伝記」(尾)
- ・龍谷大学図書館新写字台文庫蔵写本《龍大本》^(二四)
 - 一冊 漢字片仮名 「釈尊出世伝記」(内)
「釈尊出世本懐伝記」(尾)

ii②

- ・無窮会専門図書館蔵写本《無窮会本》
 - 一冊 平仮名 「しやかの本地」(簽)
- ・大英博物館蔵絵巻《大英絵巻》^(二五)
 - 三軸 平仮名 「釈迦の本地」(簽)
- ・フランクフルト実用工芸博物館蔵横型絵入本《MAK本》
 - 存一冊(中) 平仮名
- ・白百合女子大学図書館蔵横型絵入本《白百合本》^(二六)
 - 存一冊(下) 平仮名
- ・大谷大学博物館蔵横型絵入本《谷大絵入本》
 - 存三冊(一・三・四) 平仮名

iiその他

- ・高宮円照寺蔵写本《円照寺本》^(二七)
 - 一冊 漢字片仮名 「釈典記」(簽)
- ・慶應義塾図書館蔵折口信夫旧蔵永正十四年写本《折口本》^(二八)

一冊 平仮名

・天理図書館蔵写本《天理B本》^(三十七)

存一冊 平仮名 「しやかの御ほんち」(内)

・大谷大学図書館蔵写本《谷大写本》^(三十七)

一冊 平仮名 「しやくそんしゆつせの物かたり」(内)

・筑波大学附属図書館蔵絵入本《筑波大本》^(三十七)

一冊 平仮名

・ニューヨークパブリックライブラリー スペンサー

コレクション蔵絵巻《スペンサー本》^(三十七)

存二軸(後欠) 平仮名「釈尊出世略伝記」(内)

・ポドメール美術館蔵絵入本《ポドメール本》^(三十七)

二冊 平仮名 「しやかのほんち」(簽)

・立教大学図書館蔵画帖《立教大本》^(三十四)

存二帖 平仮名

・西尾市岩瀬文庫蔵絵巻《岩瀬本》^(三十五)

三軸 平仮名 「しやかかほんち」(簽)

・プラハ国立美術館蔵絵巻《プラハ美術館本》

二軸(絵・詞書別仕立) 平仮名

II 略本系

・慶應義塾図書館蔵写本《慶應本》^(三十八)

存一冊(前半のみ) 漢字平仮名

・金刀比羅宮図書館蔵絵巻《金刀比羅本》^(三十七)

五軸 平仮名 「しやかの本地」(簽)

・石川透氏蔵絵入本(絵欠)《石川本》^(三十八)

三冊 平仮名

・東洋文庫蔵絵入本《東洋文庫本》^(三十七)

三冊 平仮名 「しやかの本地」(簽)

※分類不明

・オックスフォード大学ポドリーアン文庫蔵断簡

(絵巻の絵のみ)

・佐野みどり氏蔵断簡 存十二葉(絵入本の絵のみ)

・随心院蔵 文明十八年奥書写本 「釈尊出世伝記略本」

・天理図書館蔵絵入本^(四十一)

三冊 漢字平仮名 「しやかの本地」(簽)

・イリノイ大学蔵横型絵入本 存一冊

② 分類の指標—雪山童子本生譚—

ここで、諸本分類の指標となる部分として、物語冒頭部分に近い、いわゆる雪山童子本生譚をみておきたい。この部分に諸本間で差異がみられることについては、すでに竹村信治氏の指摘がある^(四十一)。以下、竹村氏の指摘された箇所を中心に、異なる様相を確認した上で、それぞれの系統の関係について概観することとする。

伝記系と本地系とは、ともに序文にあたる文章につづけて、雪山童子の本生譚を語る。雪山童子が鷲の峯というところを通りかかったところ、谷底の鬼神が唱える「諸行無常、是生滅法」という偈を耳にする。偈の後半を聴聞することを望む童子に対して、鬼神は飢えのためにことばを発することができないと答

える。童子が鬼神の食べるものをたずねると、鬼神は人の肉を食べるのだと答える。次の表はそれにつづく部分を対照したものである。伝記系から本地系への展開や、混態本である《真福寺本》の様相をもあわせてみるために、伝記系の《天理A本》および《真福寺本》と、本地系諸本とを対照する。本地系のう

ちⅠ流布本系ⅰは《寛永版本》、同ⅱは《楠邸本》、Ⅲ略本系は《金刀比羅本》に代表させることとする。本文の引用に際しては、私に濁点・句読点等を施し、フリガナは適宜省略した。あきらかな誤字等は訂した。

伝記系		本地系		
		Ⅰ流布本系	Ⅱ略本系	
		ⅰ刊本系《寛永版本》	ⅱ非刊本系《楠邸本》	《金刀比羅本》
d	如 ^レ 是仰有 ^ハ 事、理ナリ。食 ^レ 肉ヲセネバ、物云レズト申 ^テ 、	カク仰 ^セ 有 ^ル モ奉事ハリナレドモ、肉身服セデハ物	かく仰あるもことほりなれ共、肉を食せずしては物	カク仰 ^セ アルモ理ナレドモ、肉食セズシテハモノ云レズ候
c	童子曰 ^ク 我是、生々世々 ^ニ 命惜 ^ム 非 ^ズ 身。仏法 ^ノ 志深 ^シ 。而、一ツモ無 ^キ 我身 ^ヲ 汝 ^ニ 与 ^フ 、以 ^テ 何 ^カ 仏法 ^ヲ 聴聞スベキ哉。聞 ^ク 法 ^後 、与 ^ニ 我身 ^ヲ ズレト、様々 ^ニ 仰有 ^ル 。	汝 ^ニ アタエント有ケレバ、聞セン。今、文 ^ヲ 聞 ^ク コソ身	食しうしなはれては、いかゞ仏法をもちやうもんすべき、法のまことをもき侍てこそ、此身をもあたへんずれとの給へば、	此身ヲモ汝ニ与へズレトノ玉へば、
b	羅刹申様、先 ^ニ 御身 ^ヲ 我 ^レ ニ与 ^フ 給 ^ヘ 。食 ^ハ 力付 ^テ 文 ^ヲ 唱 ^テ 申 ^ス 。	鬼神申ケルハ、マツ生身 ^ヲ アタへ給 ^フ 。服 ^ハ 力付 ^テ 文 ^ヲ 唱 ^テ 申 ^ケ レバ、	どうじの云く、我は是、生々世々に身命をおしまざれば、仏法に心ざし有によつて、二つなき命を汝にあたへんとす。うつはものを、	童子ノ云、我ハ是、生々世々ニ身命ヲ不 ^レ 惜シテ、仏法ニ志有 ^ニ 依テ、一 ^ツ ナキ命ヲ汝ニ与 ^フ ヘントス。身ヲ食失レテハ、仏法ヲバ聴聞スベキヤ。法ノ宝ヲ心中ニ聞持 ^テ コソ、
a	童子仰有 ^ル ハ、残 ^ル 処 ^ノ 文 ^ニ 句 ^ヲ 唱 ^テ 奉 ^テ 。聴聞 ^シ 其後 ^ニ 我身 ^ヲ 与 ^フ 汝 ^ニ 仰有 ^ル 。	童子仰有ケルハ、其 ^ノ 義ナラバ、今 ^ノ 文 ^ヲ 又唱 ^テ 奉 ^テ 。聴聞 ^シ 我身 ^ヲ 汝 ^ニ アタエント有 ^リ ケレバ、	童子ノ云、其儀ナラバイマ残 ^ル 半偈ヲ唱へ奉 ^レ 。其文聴聞シテ我身ヲ汝ニ与へントノ玉へば、	どうじの給ふ、さらばのこりのはんげをとなへよ。ちやうもんしてそのちまがる身をあたへんとの給へば、

g	f	e
<p>……童子、八葉蓮華坐、即一代教主成衆生化度給り。</p>	<p>傍才多羅樹云木有、此木皮摘切、大指崎食切、血出、此文書、諸行無常……書、鷲峯山投。</p>	<p>言申、</p>
<p>……童子、八葉蓮華座、文誦云、鬼神八葉蓮華台、雪山一代釈迦尊唱へり。是即法イミジキ不有也。真実貴以、雪山童子正身釈迦、頭給。</p>	<p>書參、カタハラニ采多羅樹云木有。彼木皮ハギテ、ウラ大指前食切、指血、以此文書。諸行無常……書付、就峰ナギ上タリ。</p>	<p>言申、</p>
<p>……さて、かのどうじは八葉の蓮華に座し給ひて、もんを誦し給ひていわく、鬼神八葉の蓮華、せつせん一だい釈迦ととなへ給ひしも、御法のいみじきのみならず、信心のたつときをもつて、せつせん童子、正身の釈迦とげんじあらはれ給ふ也。</p>	<p>……さて、かのどうじは八葉の蓮華に座し給ひて、もんを誦し給ひていわく、鬼神八葉の蓮華、せつせん一だい釈迦ととなへ給ひしも、御法のいみじきのみならず、信心のたつときをもつて、せつせん童子、正身の釈迦とげんじあらはれ給ふ也。</p>	<p>がいはれぬと申。その時、どうじ、さらばとて御身をあたへんとし給ふ。</p>
<p>……サテ彼ノ童子ハ八葉ノ蓮華ニ座シ給テ、文ヲ誦シ給テ云ク、鬼神八葉ノ蓮華ヲモテ、雪山ヲ一代ノ釈尊トスト唱ヘタマヘリ。カクノゴトク法ノイミジキノミナラズ、真実ニ貴以、雪山童子、生身ノ釈迦如来ト現給也。</p>	<p>……サテ彼ノ童子ハ八葉ノ蓮華ニ座シ給テ、文ヲ誦シ給テ云ク、鬼神八葉ノ蓮華ヲモテ、雪山ヲ一代ノ釈尊トスト唱ヘタマヘリ。カクノゴトク法ノイミジキノミナラズ、真実ニ貴以、雪山童子、生身ノ釈迦如来ト現給也。</p>	<p>ト申ス。童子其時サラバトテ、御身ヲ与ントシ給ヘバ、鬼神御志ヲ見奉テ、サラバ書テ進セントテ、傍ニアリシ最陀羅樹ト云、木ノ皮ヲハギ、其裏ニ指ヲ喫テ、流血ヲモテ諸行無常……ト書付テ鷲峯ヘソ投上ケル。</p>
<p>……どうじは八よりのれんげにしようじ給ひて、もんをとなへてのたまはく、きじん八えうのれんげにのせ、一だいしやくそんととなへ給ひしも、ほうのいみじきのみならず、しんじつのとつときをもつて、どうじのしやかによらいとあらはれ、</p>	<p>……どうじは八よりのれんげにしようじ給ひて、もんをとなへてのたまはく、きじん八えうのれんげにのせ、一だいしやくそんととなへ給ひしも、ほうのいみじきのみならず、しんじつのとつときをもつて、どうじのしやかによらいとあらはれ、</p>	<p>すなはちとなふ。どうじのめいもんを木の葉にかきとめて、しよぎやうむじやう……ととなへける。</p>

偈を聞かせてくれれば我が身を与えようという童子のことは (a) に対して、鬼神は先からだを与えることを求める (b)。からだを失ってしまったては偈を聞くことができないと童子が抗すると (c)、鬼神はそれでも飢えのために唱える力がないとこたえる (d)。

この a から d の部分にかんしては、伝記系と本地系 (とくに Iii) の文章は、表現のレベルにおいても重なる部分が多く、密接な関連がうかがわれる。ところが、これ以降の部分では、伝記系と本地系との間に異同が目立つようになる。伝記系では、鬼神は d のことばにつづいて、すぐに木の皮に指の血をもって

偈を書き付ける (f) が、本地系では、その間に、童子が身を投げようとし (e)、それを見て、鬼神が童子の「御志」を感じる (f 傍線部) という描写が挿入される。さらに、雪山童子譚の結びにあたる部分においても、童子が文を唱えるという本地系独自の表現が付加されている (g 傍線部)。これらの本地系独自本文 (e、f 傍線部、g 傍線部) のありかたからうかがわれるように、本地系は伝記系を骨格としつつも、部分的な増補、改変を加えることにより、成立しているとみられるのである。

つぎに、本地系諸本をみてみたい。本地系のなかには、童子と鬼神のやりとりの一部 (a・b) がみられない伝本群がある。ここでは《寛永版本》をあげたが、これに先行するとみられる《古活字本》や、後続の整版本もまた基本的にこの脱文を共有する^{四十一}。そこで、この a・b の有無を本地系 I を分類する際の一ひとつの指標とし、これをもたないものを本地系 II 刊本系とし、もつものを II 非刊本系とすることとした。本地系の流布をかんがえる際に、刊本の影響力は軽視できないものであるから、刊本系の本文か否かという分類にも一定の有効性がある。伝記系から本地系へという流れをかんがえれば、伝記系から本地系 I II 非刊本系へと展開し、そこからある段階で脱落をおこしたのが本地系 I 刊本系であることもみえてくる。

一方、II 略本系としてあげた《金刀比羅本》においては、くり返される童子と鬼神のやりとりが大幅に省筆されている。さらに、他本では、鬼神は空腹のために偈を唱えることができず、傍らの木の皮をはいで、そこに偈を書き付けたとある部分が、《金刀比羅本》では偈を唱えれば我が身を与えるという童子の

ことば (a) に、鬼神が即座に応じて偈を唱え、童子がそれを木の葉に書き留めたというかたちになっている (f)。b から e のやりとりが省かれている上に、鬼神の対応と、偈を書き留める動作主、書き付ける対象がかわっているのである (波線部)。これ以外の部分においても、このグループの伝本は、ときには若干の改変を加えながら省筆する傾向がみられる。

このグループが伝記系にはみられない本地系の独自部分をもつ (g 傍線部) ことから、基本的には本地系にもとづくものと判断できる。そこで、この伝本群を本地系のうちの II 略本系と分類した。なお、a をもつことからは、I 刊本系ではなく II 非刊本系にもとづくものであることも推測される。

ところで、この部分には、先にひとまず伝記系に分類した《真福寺本》が混態本であることもよくあらわれている。伝記系と本地系を分ける指標のひとつである g が《真福寺本》にはみられない。にもかかわらず、g の部分には本地系の本文があらわれているのである (傍線部)。このように、《真福寺本》は、伝記系を基本としつつも、本地系の独自部分を部分的に取りこんだ本文となっているのである。

以上をもとに、諸本の関係を整理すると以下のようになる。まず、伝記系の本文をもとに、本地系 I 流布本系 II 非刊本系の本文が成立する。そこから脱文を生じたのが本地系 I 流布本系 I 刊本系の本文であり、大幅に省筆を加えたのが本地系 II 略本系の本文である。《真福寺本》は、伝記系の本文に本地系の本文を部分的に挿入したものである。室町後期の書写にかかるとされる《真福寺本》のありようとしては当然ながら、もつづいた本地系本文は I 流布本系 II 非刊本系のものであったと推測さ

れる。

これはあくまで本文成立のおおまかな流れであり、そこから諸本がそれぞれに書写・刊行されてゆくわけであるから、個々の伝本成立の先後関係とは別にかんがえなければならぬが、各伝本の成立圏や享受圏の問題などを考察する上での、ひとつの見取り図とはなるであろう。

③ 各系統の特徴

ここで各系統の特徴を概観しておきたい。

I 流布本系

まず、I 流布本系のうちの i 刊本系であるが、現時点で確認できる i 刊本系諸本は、いずれも古活字版、整版本といった刊本、もしくは職業絵師の手になると推測される絵をともなう冊子本であり、いわば商品として制作された冊子本であるという点で共通する。i ①古活字本系の《中野本》と《大英絵入本》とは、金箔をふんだんに用いた美麗な絵入本である。調巻や絵の挿入位置などが一致する部分が多く、制作圏の近さがうかがわれる。これに対して、i ②整版本系の《福女本》は横型の絵入本であり、こちらは素朴な絵の典型的な奈良絵本である。

《古活字本》や《寛永版本》には絵がないが、それ以降の整版本では絵が加えられており^(四十三)、本地系の流布において、絵をともなうことの意味は小さくない。特に商品としての制作のながれのなかでは、絵は欠くことのできないものとなつてい

たとかんがえられる。

この系統の絵入本にかんしては、刊本に共有される脱文を継承することから、刊本にもとづいて制作されたたとかんがえるのが穏当であり、その制作時期は《古活字本》や《寛永版本》に遅れるものとみてよいであろう^(四十四)。

つぎに ii の非刊本系についてみてみたい。この系統には、刊本に共通する脱文がみられないことから、刊本にもとづいたものではないと判断できる。本地系諸本のなかでも残存数は群を抜いており、それだけに個別の特徴を有する伝本の集まりともいえるが、そのなかにあつて、共通の特徴があきらかな伝本群が二つある。

まず、ii ①に分類した《楠邸本》と《龍大本》は、漢字片仮名交じりという用字や「釈尊出家(本懐)伝記」という題記をもつという点の特徴であり、伝記系との関連をかんがえる上でも無視できない一群である。本文のみならずフリガナについても、両者がかなりの部分で一致することから、密接な関連が想像される。ただし、相互に脱文が補完可能なことからは、直接の書写関係ではなく、共通祖本から派生したものとかんがえられる。本文は概して善本とみてよいが、摩耶夫人の託胎の夢を阿私陀仙人が夢解きするなど、他本にみられない独自の挿話もある。この点については後に詳しく触れる。

ii ①の二本は文字のみの写本であるが、これに対して、もうひとつの伝本群 ii ②は絵をともなうことが特徴である。《無窮会本》だけは絵をもたないが、改行が他の四本の絵が配される位置に対応する例が少なくないので、《無窮会本》が拠つたのが絵巻や絵入本であつた可能性も充分にかんがえられる。絵巻

や絵入本として展開した一群ととらえておきたい。

この一群は本文の同文性が高い上に、巻や段の切れ目についても一致する部分が多い。特に、横型絵入本という形態が共通する《MAK本》《百合本》《谷大絵入本》の三本は、絵の図様もほぼ一致し、工房を共有するなど密接な関連をもつものと推測される^(四十五)。先にみたi②整本本系の《福女本》が、素朴な奈良絵風の横型絵入本だったのに対して、この三本の横型絵入本は、金泥なども用いて丁寧に描き込まれた絵をもつ。

一方、《大英絵巻》は、いわゆる豪華本であるが、注目されるのは、《大英絵巻》と三本の横型絵入本との間にも、部分的に共通する構図がみられることである。《大英絵巻》は、絵巻という特性を生かし、大画面中に背景を広くとり、そのなかに人物などを配するが^(四十六)、横型絵入本では、そこから人物が描かれる中心部分のみを切り出したかような構図となつてることが多い。もちろん、逆に横型絵入本の図様を大画面中に配したのが《大英絵巻》という可能性もあるが、横型絵入本制作時の不注意とみられる不適切な描写がみられることに注意したい。つぎに挙げたのは釈迦が卒塔婆を礼し、自身の過去世についての物語（いわゆる忍辱太子譚）を弟子たちに語る場面である。《大英絵巻》は画面左側に「ゆせんだらじゆ」とみられる樹木を描き、中央近くに釈迦を、右側に弟子たちを描く【参考図版1】。《百合本》は、《大英絵巻》の釈迦よりも右側を切り取つたような構図となつている【参考図版2】。ところが、この場面は、釈迦が卒塔婆を礼するところを描いたものであり、他本の絵をみると、この場면을絵面化する場合には、かならず卒塔婆が大きく描かれている（参考までに《筑波大本》の当該

場面を挙げた【参考図版3】）。にもかかわらず、《百合本》

には、肝心の卒塔婆が描かれていない。一方、《大英絵巻》においても、一見したところ卒塔婆が描かれていないようにみえるが、よくみると、釈迦の前に位置する土坡の影から、三本の卒塔婆の上部とみられるものがぞいでいる【参考図版1】（部分）^(四十七)。《大英絵巻》には、他本にみられない特徴的な図様も多く、物語のなかで意味をもつものを、一見しただけではそれとわからないように描いているかのような例も散見する^(四十八)。あるいは語りによる補完の意図があるのかもしれない

が、いずれにせよ、《百合本》は、《大英絵巻》の特殊な図様を理解できずに、肝心の卒塔婆を見落としたとかがえる方が蓋然性が高いように思われる。《大英絵巻》、あるいはそれに類似した図様をもとに、横型絵入本が制作されたとみておきたい。今回の諸本の分類は、主に本文を対象としたものであるが、実は絵にかんしては、この分類がかならずしも有効ではなく、本文の近さと、絵の図様の近さは比例しない場合が多い。この点の検討は今後の課題となるが、そのなかにあって、ここでみたii②のグループだけは、本文、絵の両方において、密接な対応関係がみてとれる。同一の粉本にもつぎ、複数の本が制作されるといった制作のありかたをうかがわせる一群といえよう。

なお、ii②の本文の特徴としては、摩耶夫人の遺言や、仙人との惜別の場面、涅槃における摩耶夫人の夢などが増補されていることが挙げられる^(四十九)。こういった親子や師弟の情愛にかかわる部分が増補されるのは、他本の独自部分についても多くみられる特徴である。

ii その他に挙げた諸本については、それぞれに独自の特徴を有するものといえる。紙幅の都合で各伝本をとりあげることとは

【参考図版1】《大英絵巻》 下巻第三図



(部分)



できないので、次章で『釈迦の本地』の成立、展開をかんがえる上でポイントとなる部分に絞って言及することとする。

【参考図版2】《白百合本》 第四図





II 略本系

つぎにII略本系についてみてみる。竹村氏は《金刀比羅本》

と《東洋文庫本》との共通の省筆に注目され、同一系統に属することを指摘されたが^(五十七)、この系統に属するものとしてはほかに《慶應本》と《石川本》が挙げられる。先に雪山童子本生譚の部分でみたように、この系統はI流布本系の本文を全体的に簡略化していることが特徴である。I刊本系特有の脱文がこの系統では欠けていないことから、刊本系にもとづくものではないことも判明する。ただし、先にもみたとおり、鬼神が偈を書いたとある部分が、唱えたとされていたように、単なる省略にとどまらない内容の改変もみられる^(五十八)。

II略本系のうち、《金刀比羅本》は絵巻、《東洋文庫本》は絵入本であり、《石川本》は絵が抜き取られているもの、もとは絵入本であった。いずれも豪華本と呼ぶにふさわしい体裁のものである。《金刀比羅本》と《東洋文庫本》とは調巻や絵の位置が一致する。《石川本》はほかの二本に比べて絵の数が少ないものの、ある場合にはその挿入位置はすべてほかの二本と一致する。本文だけでなく、かたちの上でも密接な関連がうかがわれる。

さらに、この三本については、石川透氏によって書写者があきらかにされている。《金刀比羅本》は朝倉重賢の、《石川本》と《東洋文庫本》は石川氏が「落蓮春」と呼ぶ人物の筆跡であるという^(五十九)。このグループもまた、工房などの制作圏を同じくするものと推測される。石川氏は、京都の絵草紙屋、城殿の印のある絵巻に、朝倉重賢の手になるものがあることも指摘されており、絵草紙屋や工房といった問題をかんがえる上でも注目されるグループである。

《慶應本》だけは、絵をとみなわない写本であるが、二元和

七年神無月吉日／稽住之時／学養」という奥書が付されている。この奥書が記される丁は後補であり、本文部分は室町末江戸初期の写とみられている^(五十二)。元和七年（一六二一）を信じるならば、古活字版の刊行とほぼ同時代であり、古活字版の刊行時期、あるいはそれを溯る時期に、すでに略本系の本文が流布をみていたということになる。

三 『釈迦の本地』本地系諸本概観

以上、管見の及ぶかぎりの本地系諸本について、本文に注目して分類を試みた。最後にこれらを概観したときに見えてくるものについて、少し触れておきたい。

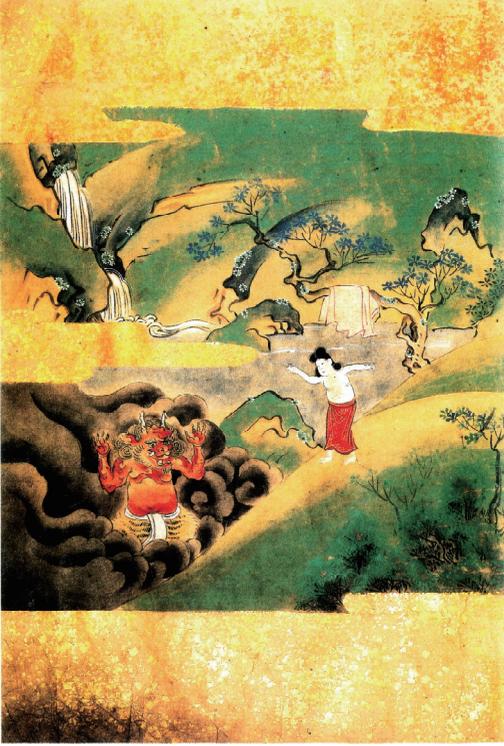
まず、今回の分類によつて、あきらかに特徴を共有するグループが複数あることが浮かび上がってきた。そしてそれは、刊本や絵巻、絵入本といった、商品としての『釈迦の本地』の展開の一端をあらわすものといえる。**I** 流布本系の刊本系統だけでも、**i** ①古活字本系、**i** ②整版本系という二つのグループが確認できる。**ii** 非刊本系のなかには、**ii** ②という本文、挿絵ともに極めて密接な関連を有する絵巻、絵入本のグループがあった。また、**ii** 略本系も絵巻、絵入本を中心に展開したとみられるグループであり、制作圏が近接することがうかがわれる。以上のように、少なくとも四つのグループが指摘できる。さらに、**I** **ii** その他に掲出したなかにも、それぞれ個別の特徴を備えた本ではあるが、『ボドメール本』《立教大本》《岩瀬本》《プラハ美術館本》など、職業絵師の手になる絵をとまなう絵巻、絵入本が含まれている。近世における書肆、絵草紙屋、工房にお

る制作の実態については、いまだ不明な部分も多く、ここにみたようなグループが、どのレベルにおけるものなのかを見極めることは難しいが、『釈迦の本地』がいくつかの異なった制作環境において商品として制作されていたことだけは確認できよう。裏を返せばそれだけ需要があったということでもあろう。

なお、先にも少し述べたとおり、絵にかんしては、今回の分類はかならずしも有効ではない。『本地』の絵は、ほぼ同一構図、図様の**I** **ii** ②グループを例外として、各本の独自性が際立つことの方が多い。しかしながら、グループを越えて図様や構図が一致する例も、数はそれほど多くないものの、たしかにみられ、それぞれがまったく無関係に描かれたものでないことがうかがわれる。それは、たとえば、冒頭の雪山童子譚に対応する部分で、本文で言及がないにもかかわらず、木の枝に童子の衣が懸かった図様が多く描かれることなどにあらわれている^(五十四)。雪山童子譚にかんしては、**I** **i** ①《中野本》【参考図版4】と**I** **ii** ②《大英絵巻》【参考図版5】、《谷大絵入本》、**I** **ii** ②その他《プラハ美術館本》とが、特に似通った構図、図様となっている。太子の髪型や、裸の上半身に赤い袴（腰布）という姿、両手を広げたポーズ、鬼神の周囲に本文に記述のない黒雲を描く点など、細部にわたつて共通点がみられる。この四本ほど緊密な関係ではないものの、**I** **i** ②《福女本》、**I** **ii** ②その他《岩瀬本》【参考図版6】、**ii** 《金刀比羅本》^(五十五) もまた、木にかかった衣、赤い袴（《岩瀬本》のみ白い腰布）だけを身につけた童子を描くという点では共通する。一方で、《中野本》同様**I** **i** ①に分類される《大英絵入本》【参考図版7】は、木の上の衣を描かず、赤い衣の童子と着衣の鬼を描くもので、赤

い着衣と天衣の鬼神という点では、むしろⅠⅡその他(《ボドメ
 ール本》と共通する。さらに、整版本のうち、明暦二年刊絵入
 版本系統の挿絵をみると【参考図版8】、着衣の童子や全体的
 な構図という点ではⅠⅠ①《大英絵入本》に近いが(ただし反
 転している)、鬼神のポーズはⅡ《金刀比羅本》と近似する。

【参考図版4】《中野本》巻一第一図



このように、絵の関係は本文の関係以上に錯綜しており、本文
 で分類したグループ分けとはかならずしも一致しない。同一工
 房で異なった粉本が用いられた可能性や、工房を越えて粉本が
 共有されていた可能性なども視野に入れる必要がある。

【参考図版5】《大英絵巻》上巻第一図



【参考図版6】《岩瀬本》上巻第一図



【参考図版7】《大英絵入本》第一冊第一図



【参考図版8】東京大学総合図書館霞亭文庫蔵無刊記後印本第一図



粉本という点では、絵画作品などとの比較検討も課題のひとつである。『本地』の絵は、仏伝図等の定型にかならずしも副わない、独自の図様であることが多いが、少数ではあるものの、後述のⅠ ii その他《スベンサー本》のように、仏伝図との密接な関連がうかがわれる本もある。また、Ⅱ《金刀比羅本》には、東アジアで共有される仏伝として近年注目を集めている明代の宝成撰『釈氏源流』^{五十九}の影響が推測される絵も含まれる（『車匿還宮』場面など）^{五十七}。成立圏の問題をかんがえる上でも、仏伝図などの絵画資料との、さらなる比較検討は重要である。

ところで、以上みてきた商品として制作された刊本、絵巻、絵入本とは、あきらかに異質の絵巻、絵入本も残存する。Ⅰ ii その他に掲出したうちの『筑波大本』《スベンサー本》である。『筑波大本』の絵は先掲の【参考図版3】を一見すればあきらかなように、職業絵師の手になるものではない。構図や図様の面でも、他本との共通点が見いだせない、きわめて独自性の高い絵がほとんどである。《スベンサー本》もまた、素朴な味わいの絵をもつ絵巻である。こういった、商品とは別のありかたもまた、『本地』受容のひとつの相といえる。

なお、『スベンサー本』には、耶輸陀羅をめぐる提婆達多との勝負の場面などに独自記事がみられる。これについて、小峯和明氏は、仏伝図との交渉などによるものと推測されているが^{五十八}、スベンサー本と極めて近い図様をもつ愛知県東龍寺蔵「仏伝涅槃図」はその推測を裏付けるものである^{五十九}。《スベンサー本》は現存の絵入本、絵巻のなかでももっとも古く、十六世紀にさかのぼるとみられている。こういった仏伝図との交

渉の痕跡にあわせて、「高野山地蔵院」の印がみられることなども含め、商品として流布する以前の、絵をともなった享受のありかたをかんがえる上でも示唆に富む伝本である。

書肆、絵草子屋における展開以前の様相に目を向けると、作品の成立にもかかわって注目されるのが、漢字片仮名本の存在である。本地の成立基盤に法会唱導の場があったという認識は広く共有されており、稿者も特に天台における『法華経』の注釈にかかわる部分を中心に考察を加えたことがある^{六十}。そう

いった成立の場の問題をかんがえれば、『本地』は始発点においては、漢字片仮名であったとみるのが自然であろう。『本地』のなかでもっとも成立が早いとみられる純然たる伝記系三本のうち、二本が漢字片仮名本であることもそれと照応する。これ以外の漢字片仮名本は、伝記系でありながら本地系の記述もあわせもつ『真福寺本』、本地系Ⅰ ii ①『楠邸本』、『龍大本』、およびⅠ ii 『円照寺本』の四本である。『楠邸本』には「西念寺」の、『龍大本』には「立德寺」の識語や印が付されており、これら四点はいずれも寺院の所蔵、旧蔵にかかるものである。とくに、『真福寺本』の後補表紙に「蓋為法談等書記畢 備」と、その書写目的が記されていることは、漢字片仮名本『本地』の、唱導の場における享受のありかたを如実に示すものである。Ⅰ ii ①『楠邸本』は、全編にわたって詳細なフリガナを付しつつ（『龍大本』のフリガナは部分的）、端正な楷書で丁寧な書写されており、軌範意識にもとづいて書写された本であることがわかる。本文も概ね善本とみてよく、他本に散見する、仮名にひらかれたがために文意不通になっている部分の読解に資すると

ころも少なくない^(六十一)。『本地』の作品読解の上で参照すべき意義のある本と思われる。

ただし、**I ii ①**《楠邱本》《龍大本》が、本地系成立当初の本文をそのまま保存しているかという点については、注意が必要である。この系統には釈迦の誕生にかかわる場面などに独自の記事がみられるが、後に他本が一律にこの部分を削除したとかんがえる積極的な理由が見いだせないことから、後の増補部分とかんがえる方が蓋然性が高いからである。

さらに、この独自部分にかんしては、ほかの仏伝資料との関連がうかがえる。冒頭でも触れた『釈迦如来八相次第』との密接な関連がみられるのである。以下、**I ii ②**《寛永版本》、**I ii ①**《楠邱本》、『釈迦如来八相次第』(『八相次第』^(六十二))の託胎の夢想にかかわる部分を引用する。

I ii ②《寛永版本》

或時、摩耶夫人、天じやうのかうらうにしばらく御すいめん有ければ、釈迦如来の、人間のほらにやどり給ひて、仏法のたねをつぎ、未来衆生をさいどし給はんために(中略)浄飯王を父とし、まや夫人を母とさだめ奉らんとて、御わきの下より入給ふと御覽じければ、やがて御懐妊の心にてぞまします。

I ii ①《楠邱本》

アル時、摩耶夫人、殿上ノ高楼ニ暫ク御睡眠アリケレバ、釈迦如来、人間ノ腹ニ宿レ給ヒ、仏法ノ種ヲツギ、衆生ヲ濟度シ給ハンガ為ニ(中略)浄飯王ヲ父トシ、摩耶夫人ヲ母

卜定奉給。サルホドニ、夫人、御睡眠ノ間ニ夢相マシマス。大象光ヲ放テ身中ニ入ト覺玉フ。カクテ夢覺了テ、御身已ニオモクナラセ給フ。大王此事聞召シ、吉凶更ニ難知リトテ、阿私陀仙人ヲ召テ夢ヲ占ハシム。仙人云、日輪光ヲ放テ身中ニ入ルト見玉ハ、転輪聖王タル太子ヲ懐妊シ給ヘシ。月輪光ヲ放テ入ルト見給ハ、諸ノ大王ニスグレタル賢王ヲ産シ給フベキ也。大象光ヲ放テ入ルトミタマハ、皇子誕生アリテ在家ニシテ十九年、転輪聖王ノ果位ヲ持チヤガテ十九歳ニ城ヲ出テ、檀特山ニユキ、苦行樂行ヲ十二年経テ後、菩提樹下ニ成道シ畢リ、波羅奈国ニテ法ヲトキ、一切衆生ヲ濟度シ給フ王子タルベシト占ハル。然ルニ夫人ノ御夢第三ノ夢相也。大王コノ事聞召シ、歡喜無極リ。我未一子ヲ持ズシテ、迦毘羅衛國ヲ讓ベキ太子ナカリシニ、夫人懐胎アルベキ由シ、誠ニ以テ喜ノ中ノ喜哉トテ、大王、夫人ヲ恭敬シ給フ事、インギンナリ。

『釈迦如来八相次第』

時ニ当テ、夫人マドロミ給ニ、大象光ヲ放テ身ノ内ニ入ルト云夢ヲミル。夢サメ畢レバ其身スデニ重ク成レリト奏シ玉フニ、大王吉凶知り難シトテ、阿私陀仙人ニ此夢ヲ占ナハシム。仙人、相シテ云、日輪光ヲ放テ身ノ内ニ入トミテハ、転輪聖王タルベキ太子ヲ懐妊ス。月輪光ヲ放テ身ノ中ヘ入トミテハ、諸ノ大王ノ中ニ勝タル賢王ヲ生ズベシ。大象光ヲ放テ身ノ中ニ入トミテハ、家ニ有テ十九年、転輪聖王ノ報ヲ受ケ、十九ニシテ城ヲ出デ、六年苦行ノ後、菩提樹下ニシテ仏ト成テ、八万四千ノ法門ヲ説テ、一切衆生

ヲ利益スベキ聖子太子ヲ生ベシ。夫人ノ御夢ハ第三ノ占也ト奏ス。大王此言ヲ聞食シテ、歡喜無極。我レ未ダ子ヲ生ズ。誰ニカ迦毘羅衛國ヲ授ケ十善ノ位ヲモ繼スベキト思ツルニ、イミジキ太子ヲ懷妊シ玉ヘル事ヨトテ、夫人ヲ恭敬シ玉フコト、慇懃ナリ。

《楠邱本》は、託胎の夢想の部分までは、《寛永版本》をはじめとする本地系本文と基本的に重なる（傍線部）。しかしながら、夢想の描写は、《寛永版本》が「御わきの下より入給ふ」とするのに対し、《楠邱本》では「大象光ヲ放テ身中ニ入ル」と、仏伝經典に一般的な象が登場する。これは『八相次第』「大象光ヲ放テ身ノ内ニ入ル」（波線部）と対応するものであり、《楠邱本》はここから急速に『八相次第』に寄り添うかたちになる。摩耶夫人から夢の話聞いた浄飯王が阿私陀仙人に夢説きをさせるというこの挿話は、ほかの本地系諸本にはみられないもので、**I ii ①**の独自本文といえるが、それは、直接間接の問題はあろうが、『八相次第』にもとづくものとみてよいであろう。

これにつづいて、懐胎中の瑞相がさまざまに語られた後、誕生の場面となる。引用は省略するが、**I ii ①**の瑞相の描写は《寛永版本》などに比して格段に詳細である。そしてこの部分もまた、『八相次第』と表現のレベルで重なるのである（表10）。

このように、漢字片仮名というかたちを残す**I ii ①**にもまた、寺院に集積された仏伝資料との交渉により、変容を遂げた痕跡がみとめられる。その変容が起った場や時期については不明としかいいようがないが、天台色の濃い『釈迦の本地』伝記系、本地系と同様、『八相次第』もまた、天台系であることが指摘

されているので（表10）、天台系の唱導資料の集積される場を想定することは許されるであろう。

以上、大変煩雑な叙述となったが、『釈迦の本地』諸本の分類・整理を試みた。本文の重なり注目した分類という都合上、個別の差異については詳述しきれなかったところが多い。結局のところ、個々の伝本を対象とした検討が必須なことにかわりはないが、諸本にかんして多少とも見通しがきくようになれば、今後の作品研究に資する点もあろう。個別の伝本研究と、総体的な作品研究という双方向からのアプローチを重ね、東アジアにおける宗教文芸という見地から『釈迦の本地』という作品を定位することが、今後の課題である。

[注]

- (一) 東大寺図書館蔵。池上洵「東大寺図書館蔵『釈迦如来釈』—解説と翻刻—」《文化学年報》一六、平成九年（一九九七）三月。
- (二) 金剛寺蔵。ほかに龍門文庫に所蔵がある。後藤昭雄「教児伝—天台僧の書いた仏伝—」《叡山の和歌と説話》平成三年（一九九二）、世界思想社。
- (三) 華藏寺蔵。ほかに慶応大学、真福寺、石川透氏の所蔵本が確認されている。『中世仏伝集』真福寺善本叢刊第一期五（平成十二年（二〇〇〇）、臨川書店）。小峯和明「『釈迦如来八相次第』解題」湯谷祐三「華藏寺蔵『釈迦如来八相次第』解題—日本中世説話文学と仏伝資料—」（同）。
- (四) 小峯和明「東アジアの仏伝をたどる—比較説話学の起点—」《文学》六一六、平成十七年（二〇〇五）十一月、岩波書店。

・同「東アジアの仏伝をたどる 補説」『説話・伝承の脱領域』平成二十年(二〇〇八)、岩田書院) ほか。

(五) 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』昭和五十七年(一九八二)、三省堂。『中世王朝物語・御伽草子事典』(平成十四年(二〇〇二)、勉誠出版)に転載)。黒部通善『日本仏伝文学の研究』(平成元年(一九八九)、和泉書院)。

(六) 以下、諸本については本文中に所蔵・略称・員数・用字・題記を示し、影印・翻刻・解題等がある場合には注に示すこととする。国文学研究資料館にマイクロ資料が所蔵される場合は、「国文研マイクロ」として示し、同館の日本古典籍総合目録データベースで画像が公開されている場合は、「国文研DB」と注記する。Web上の情報にかんしては、いずれも本稿執筆時点のものである(URLは省略)。

(七) 『室町時代物語集』四に翻刻・解題。

(八) 『室町時代物語大成』七195に翻刻。国文研マイクロ。

(九) 黒部通善『日本仏伝文学の研究』(前掲注(五))に影印・翻刻・解題。

(十) 《学習院本》の題箋には「しよかのほんし」とあるが、本文と同筆かどうかについては判断できない。

(十一) 拙論『釈迦の本地』とその展開―涅槃の場面を端緒として―(小峯和明編『東アジアの仏伝文学(仮)』近刊、勉誠出版)。

(十二) 『室町時代物語集』四に翻刻・解題。原本は焼失。

(十三) 黒部通善「室町時代物語『釈迦物語』考―仏伝経典への志向―」(『日本仏伝文学の研究』前掲注(五))。竹村信治・吉富裕子『『釈迦の本地』の形成―諸本の整理、福岡女子大学蔵本の位置

など―』(『香椎潟』三三、昭和六十二年(一九八七)九月)。

(十四) 『中世仏伝集』(前掲注(三))に影印・翻刻・小峯和明『通俗釈尊伝記』解題)。

(十五) 前掲注(十三) 竹村氏論文。

(十六) これまでに確認されている古活字版は以下の六点である。

- ・ 龍門文庫蔵(高木文庫旧蔵) 本 三冊
- ・ 大東急記念文庫蔵(久原文庫旧蔵) 本 存二冊(上下)
- ・ 安田文庫旧蔵本 存二冊(上下)
- ・ 国立国会図書館蔵本 存一冊(上) Web上で全画像公開
- ・ 天理図書館蔵(岡田文庫旧蔵) 本 存一冊(中)
- ・ 藤井隆蔵本 存一冊(下)

このうち下巻については、大東急記念文庫蔵本と安田文庫旧蔵本が同種、龍門文庫蔵本、藤井隆蔵本は、いずれも異植字版であることが指摘されており、少なくとも三種の版があったと推測されている(藤井隆「古活字版及び乱版に関する二・三の考察」『帝塚山短期大学紀要』六、昭和四十四年(一九六九)三月)。整版本は五種類に分類できる。所蔵等の詳細な情報は省略したが、Web上に画像が公開されているものについては()内に所蔵等を示した。

- ① 寛永二十年橘屋源兵衛刊本(国文研)
- ・ 同右慶安元年後印本(岩瀬文庫(国文研DB))
- ② 山田二郎兵衛後修絵入本
- ③ 明暦二年刊絵入本
- ・ 寛文二年吉野家権兵衛後印本
- ・ 無刊記後印本(東大霞亭文庫・早稲田大学)
- ④ 寛文十年本問屋刊絵入本

・本問屋後印本

⑤・和泉屋庄次郎刊絵入本

・同右桑村半蔵後印本(国会図書館)

古活字版、整版本の詳細については『室町時代物語集』四、『室町時代物語大成』七196の解題を参照されたい。

(十七)『室町時代物語大成』七196の寛永二十年版本翻刻に異同として傍記される。

(十八)中野幸一編『釈迦一代記二十四孝』(昭和六十三年(一九八八)、早稲田大学出版部)に影印・解題。後掲の【参考図版4】は当該書所収の口絵から転載した。

(十九)『秘蔵日本美術大観』二大英博物館二(平成四年(一九九二)、講談社)に絵のみ掲載。後掲の【参考図版7】は、British Museum free image service 提供の画像を使用した。

(二十)『室町時代物語大成』七196に翻刻。国文研DBにて国文学研究資料館蔵本等の全画像公開。

(二十一)井上敏幸・竹村信治「福岡女子大学蔵『釈迦の本地』」(『香椎潟』三三、昭和六十二年(一九八七)九月)に翻刻。

(二十二)中島谷子「翻刻・楠邸文庫蔵『釈尊出家傳記』」(一)～(三)『文藝論叢』五〇・五一・五三、平成十年(一九九八)三月・九月・平成十一年(一九九九)九月)に翻刻。

(二十三)『中世仏伝集』(前掲注(三))に翻刻・湯谷祐三「龍谷大学図書館蔵『釈尊出世伝記』解題」。

(二十四)辻英子『在外日本絵巻の研究と資料』(平成十一年(一九九九)、笠間書院)に影印・解題。大英博物館HP Collection onlineにて全画像公開。後掲の【参考図版1・5】は、British Museum free image service 提供の画像を使用した。

(二十五)フランクフルト実用工芸博物館(Museum für Angewandte Kunst Frankfurt)において二〇〇〇年二月十七日から四月二十四日まで開催された展示『Mönche, Monster, schöne Damen / Japanische Malerei, Buch- und Holzschnittkunst des 16. bis 18. Jahrhunderts in Frankfurt am Main』の図録に解説および一部画像掲載。

(二十六)佐藤信一ほか「翻刻へ白百合女子大学蔵『釈迦の本地』」(『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』四、平成十六年(二〇〇四))に翻刻。白百合女子大学図書館HP 貴重書ライブラリーにて全画像公開。

(二十七)『真宗史料集成』五 談義本(昭和五十八年(一九八三)、同朋舎出版)に翻刻。

(二十八)『中世神仏説話』(『古典文庫』三八)に「雪山童子」として翻刻。太子十九歳を記したところで終わる。

(二十九)『室町時代物語集』四に解題。

(三十)中島谷子「翻刻『しやくせんしゆつせの物かたり』」(上)・(下)『文藝論叢』四三・四五、平成六年(一九九四)九月・平成七年(一九九五)九月)に翻刻。

(三十一)筑波大学附属図書館HP 貴重書コレクション電子展示にて全画像公開。なお、『筑波大本』は改装されているが、国文研DBで公開されているマイクロは改装前のものである。

(三十二)奈良絵本国際研究会編『在外奈良絵本』(昭和五十六年(一九八一)角川書店)に影印・翻刻。

(三十三)小峯和明『釈迦の本地』の物語と図像「ポドメール本の提婆達多像から」『文学』一〇一五、平成二十一年(二〇〇九)九月・十月、岩波書店)。

(三十四)小峯和明「東アジアの仏伝文学・ブツダの物語と絵画を説

むー日本の『釈迦の本地』と中国の『釈氏源流』を中心に」(広島大学大学院教育学研究科国語文化教育教育学講座『論叢国語教育学』復刊三号、第六回国語教育カフェ講演録、平成二十四年(二〇一二)七月)。

(三十五) 西尾市岩瀬文庫で平成十九年(二〇〇七)八月十一日から十月十日まで開催された奈良絵本・絵巻国際会議 特別展示「絵物語ファンタジア―岩瀬文庫の絵巻・絵本―」の図録に阿部美香氏による解説および一部画像掲載。後掲の【参考図版6】は、岩瀬文庫を通じて石川透氏より提供を受けた画像を使用した。

(三十六) 石川透「慶応義塾図書館蔵『釈迦の本地』解題・翻刻」(『三田國文』三六、平成十四年(二〇〇二)六月)。

(三十七) 国文研マイクロ。

(三十八) 『室町物語影印叢刊』一七(平成十五年(二〇〇三)、三弥井書店)に影印・解題。

(三十九) 東洋文庫HP 財団法人東洋文庫所蔵画像・動画データベースにて全画像公開。

(四十) 『室町時代物語集』四に解題。前掲注(十三)竹村氏論文にも言及あり。

(四十二) 前掲注(十三)竹村氏論文。

(四十二) 前掲注(十六)に掲出した古活字本および整版本は、異同や省略は散見するものの、基本的に同系統の本文系統とみなしてよい。整版本の②山田市郎兵衛後修絵入本は雪山童子の条をもたないが、版木は《寛永版本》のものを利用していることが指摘されていることから、同一系統とみなしうる(『室町時代物語大成』七196の解題による。稿者未見)。また、⑤和泉屋庄次郎絵入本の系統のものは、改変や省略が加えられた本文であるが、雪山童

子の部分にみられる刊本共通の説文は共有する。

(四十三) 前掲注(十六)。

(四十四) 前掲注(十三)竹村氏論文では、『福女本』では絵にかかわって叙述が整理されていることを理由に、『寛永版本』が『福女本』を受けたものと推測されている。両者の先後はいずれとも決しがたいが、刊本をもとに製作された奈良絵本、絵入本の例も少なくないことから、現時点では刊本が先行するとみておきたい。(四十五)『MAK本』と『白百合本』とはいずれも零本であり、『MAK本』は中巻のみ、『白百合本』は下巻のみ存、巻分けも一致するものではあるが、挿絵の筆致は異なり、僚巻ではないようである。なお、『谷大絵入本』だけは五冊構成(存三冊)であったと推測され、調巻が異なる。

(四十六) 小峯和明「釈迦の涅槃と涅槃図を読む」(『これからの国文学研究のために』平成二十六年(二〇一四)十月、笠間書院)。

(四十七) 本文では卒塔婆の数に言及はなく、文脈からは一本であるとかんがえるのが自然であろうが、本地系の絵においては、複数の卒塔婆を描く例も散見する(『大英絵入本』は二本、『中野本』は三本、『岩瀬本』は四本の卒塔婆を描く)。

(四十八) 例えば太子と提婆達多とが耶輸陀羅をめぐって弓の勝負をする場面で、的の背面が描かれ、勝負の結果がわからないようになっていいるなど。

(四十九) 前掲注(二十四)辻氏解題には、『大英絵巻』と『寛永版本』との異同が一覧されており、『大英絵巻』の特徴が詳述されているが、この『大英絵巻』の特色は、ほぼそのままこの系統の特色としてあてはまる。ただし、待遇表現を多用する点については『大英絵巻』が際立っている。

(五十) 前掲注(十三) 竹村氏論文。

(五十一) この例については竹村氏が、原拠である『涅槃經』に「羅刹即説」とあることとの関連を指摘される(前掲注(十三) 竹村氏論文)。

(五十二) 石川透「奈良絵本制作の側面」・「奈良絵本筆者の諸問題」

『奈良絵本・絵巻の生成』平成十五年(二〇〇三)八月、三弥井書店 ほか。

(五十三) 前掲注(三十六) 石川氏解題。

(五十四) 木に懸かった童子の衣が描かれることにかんしては、『梁塵秘抄』の今様などでも知られる、薩埵太子本生譚の影響などもかんがえられようか。

(五十五) 小峯和明「絵巻のことばとイメージ」『釈迦の本地』をめぐる―(石川透編『魅力の奈良絵本・絵巻』平成十八年(二〇〇六)、三弥井書店) 掲載の図A参照。

(五十六) 前掲注(三十四) 小峯氏論文、同「釈氏源流を読む」『図書』平成二十四年(二〇一二)七月、岩波書店、同「日本と東

アジアの(仏伝文学)―『釈氏源流』を中心に―(『仏教文学』三九、平成二十六年(二〇一四)四月) ほか。

(五十七) 『釈氏源流』は狩野元信筆とされる清涼寺蔵『釈迦堂縁起』にも参照されたことが指摘されている。土谷真紀「釈迦堂縁起絵巻」をめぐる一考察―第一巻・第二巻仏伝部分を中心に―(『美術史』五七―一、平成十九年(二〇〇七)十月)、畑麗「釈迦堂

縁起絵巻の研究―仏伝図としての視点を中心に―(『鹿島美術研究』年報二十五別冊、平成二十年(二〇〇八)十一月)。

(五十八) 小峯和明『釈迦の本地』の物語と画像―ボドメール本の提婆達多像から―(『文学』十一五、平成二十一年(二〇〇九)

九月)。小峯氏は、この場面の独自記事が《スペンサー本》と《ボドメール本》とに共通してみられることを指摘する。表現のレベルにおいても、両者は近い関係にあり、ある段階で何らかの交渉があったことがうかがわれるが、『ボドメール本』はこれ以外にもいくつか独自記述をもち、『スペンサー本』現存部分がそれを共有しない(後半は欠けているため確認不能)ことから、今回はグループとして立てることはしなかった。

(五十九) 前掲注(十一) 拙論。東龍寺本「仏伝涅槃図」については渡邊里志「東龍寺蔵仏伝涅槃図における仏伝説話場面」『仏伝図考』第三章(中央公論美術出版、平成二十四年(二〇一二)参照。

(六十) 拙論『釈迦の本地』とその淵源―『法華経』の仙人給仕をめぐる―(小峯和明監修、石川透編『中世の物語と絵画』平成二十五年(二〇一三)、竹林舎)、『釈迦の本地』とその基盤―『法華経』とその注釈世界とのかかわり―(神戸説話研究会編『論集 中世・近世説話と説話集』平成二十六年(二〇一四)、和泉書

院)。

(六十二) II略本系《慶應本》は、漢字平仮名本であるが、漢字には宛て字やあきらかな誤解にもとづく表記も多く、仮名書きや語りなどを通過した本文とみられる。

(六十二) 『中世仏伝集』(前掲注(三))。引用は真福寺本により、破損部分等は華藏寺本で補った。

(六十三) 誕生時の瑞相にかんしては、『普曜経』等に三十二の瑞相が列挙され、それを絵画化する例(高野山金剛峯寺蔵「釈迦誕生図」など)もあることから、関心を集めた要素であったことがうかがわれる。

(六十四) 前掲注(三) 小峯氏解題。

〔付記〕

図版の掲載にあたって、ご高配を賜りました大英博物館、白百合女子
大学図書館、筑波大学附属図書館、西尾市岩瀬文庫、東京大学総合図
書館をはじめ、調査に際してお世話になりました関係諸機関に御礼申

しあげます。また、小峯和明氏、石川透氏、金光桂子氏からは、貴重
な資料をご提供いただきました。記して御礼申しあげます。

(もとい まきこ・筑波大学人文社会系准教授)